いのちと地域を守る

●次回の授業内容について話 し合う東北大生=1月24日、 東北大・中学生に防災の出前 授業をする東北大生=2019年 11月、東京都内(邑本教授提

とはない。

探

東北大特任教授

ながみ・ふうじ 東大大学院総 合文化研究科博士後期課程単位取 合文化研究科博士後期課程単位取 行力ル・メガバンク機構特任教 授などを経て、13年同大東北メデ 行力ル・メガバンク機構特任教 受した報戦略室長。専門は科学コ ミュニケーション、ゲノム医科学 の倫理。東京都出身。45歳。

きく減らす可能性があるの

閉じ込められた部屋か

学における被災を伝えると

大学における講演で、大

いう小さなことを、

りするだけで、

危険性を大

ても道半ばである。

めぐる情報の流布を見てい 今の新型コロナウイルスを

の位置や向きを少し変えた

ものにしたり、

本棚や靴箱

室内履きをかかとのある

るようになってきたが、

くことの大事さも認識され

が、出火があった空間と同 らようやく脱出できた場所

じでなかったのは幸運にす

通じて遠くに届けられるこ

地味さもあり、報道機関を

究室での私たちの体験は、

多様な人

へが毎日出入りし、

とも。

簿は存在しない。 連

まみれのガラスの破片をサ

点呼は記憶が頼り。薬品

地味な被害だ。

た人を網羅した確

職場での震災体験に充てて 係なく、持ち時間の1割を 際、依頼されたテーマに関 の被災3県以外で講演する がある。岩手、宮城、

風二さん

うなものだ。

医学系の教室には学生ら

開く方向には本棚があるこ

面する可能性が高いのは、

近年、

論拠を重視し、

き

こうした日常の場における

ちんと事実確認を行ってい

震で現実に多くの人々が直

なかなか伝わらない かったことやその理由は、

上には蛍光灯があり、

内履きはサンダル。靴箱の 器具を扱う実験室でも、室

なかった被災は、

注目され

わりやすく、

問題が生じな

しかし、

大規模な地

地味で被害らしい被害が出 験し見聞きしたことだが、

ピードは、情報の種類など

情報の伝わりやすさやス

によって異なる。デマは伝

ここ9年続けてきたこと

福島

なく、状況も当時と似たよは、大学などの研究機関かは、大学などの研究機関からが多い。各所の防災意識は、震災前の私たちと大差は、震災前の私たちと大差になく、状況も当時と似たよ

ソコンにしかない。ガラス スできないデスクトップパ 絡先は、停電時にはアクセ

₽,

9年前には多くの人が経

屋に閉じ込められること

を論文で示すことで訴える

こともしてきた。

して扉が開かなくなり、部

全ての本が散乱 本棚は転倒を

加の有無が、万一の避難行

私たちは避難訓練の参 なかなか伝わらな

動と関連があるという事実

職場の震災体験

語る理由

訴え

いる。オフィスや大学の研

震災を学び中高生に伝承





ミのうち、震災復興のゼミ後に全員が履修する基礎ゼ 災について学んだことを伝 を選んだ学生だ。 た1年生の有志10人。 学年で内容変更 -は、各学部から集まっ

「風化を防ぎたい」「震

3年生の学年に応じて異な

京都内の公立中で、

の男子学生の母校である東

たのは昨年11月。

メンバ

思う」と期待する。

る内容を用意した。

施するきっかけは学生からえたい」―。出前授業を実 題を考えた。実習で名取市 学の視点から復興を巡る課 だ。学生の熱意に触れ、担 閖上地区の津波被災地に 企画会議が始まった。 けて、昨年夏に学生による 授(認知心理学)が呼び掛 学国際研究所の邑本俊亮教 当教員の1人、同大災害科 寄せられたゼミのリポ も足を運び、住民の声も聴 ゼミでは、心理学や歴史

知識 風化防止へ生かす

で易しく解説。中学1年生

には楽しみながら防災知識

い思い込みについてクイズ

の喜多亮介さん(20)は「災 動や、福島の風評被害の現 状を話す予定だ。 巨大地震を想定した避難行 巾の明石高で、南海トラフ 被災未経験でも 母校の教壇に立つ理学部 次回は3月、兵庫県明石

学び、教訓を伝えられるよ 次世代への震災と教訓の伝 ような防災教育システムの うになること。今後、その 承は大きな課題だ。邑本教 授は「震災を知らない人が

含め、学生は主体的に授いた。それらの学習成果も べきか悩みながらの作業 初の出前授業にこぎ着け 何をどう伝える 前例もモデ (19)は「私たちの話を聴き、 で法学部の野津沙織さん 実際に被災地に行きたいと いう生徒が増えればいいと 繰り返さなくて済む。 その

業内容を練る。

えたい」と意気込む。 ということを、高校生に伝 知識がない状態から学んだ 今はプラスに考えている。 ない私が授業をしていいの る。青森市出身で経済学部 かという思いもあったが、 で大きな被害を経験してい の松山唯さん(19)は「震災 ポイントにする学生も たことを、自らのセー 震災を詳しく知らなか

と題し、緊急時に陥りやす

災害に備えて心理を学ぶ」

中学3年のクラスでは

丸9年。 過ぎた年月ととも に風化の懸念が強まる中、 東日本大震災から3月で

選択するゲームをした。

を身に付けてもらうため、

防災リュックの中身を取捨

ったが、津波の到達予測時間が早く、 で想定していた避難先は2・5㌔離れ 想定しておく必要性を実感している。 いと判断。緊急時の決断の重みや、 職員ら約90人で校舎屋上に避難した。 長だった井上剛さん(62)=白石市=は 東日本大震災発生時、宮城県山元町 避難先を複数 間に合わな た坂元中だ マニュアル の中浜小校

生が、都内などの中高生に防災授業を行っている。 東北出身ではない学生も多いが、被災地の実情を

知識を生かし、避難の教訓や災害から身を守る知知るうちに震災を伝承する重要性を実感。学んだ

恵を同世代に広げる。

で出前授業

東北大で東日本大震災の復興をテーマに学ぶ学



井上剛さん

■ とっさの判断、校舎屋上へ(宮城県山元町)



元中へのルートは平地が続相談したばかりでした。坂 の避難を決めました。 までは徒歩なら20分以上。 とする判断が必要だと申 頭や教務主任と避難方法を も津波注意報が出され、 同僚と協議し、校舎上階へ び込んできました。 坂元中 ちょうど2日前の9日に まずは時間を基準 教

と「大津波警報」 の職員室のテレビを付ける 室で地震に遭いました。

> を呼び掛け、2階のホー が敷地内にいました。避難

ビから、今度は「10㍍の津

近くの教室のテレ

自分は外で様子を見ている の屋根裏倉庫に避難させ、

海がふくれ、真っ黒い

に到達」といった情報が飛

の支えとなりました。 と偶然ですが、11日の行動

欠席者らを除く児童57人

でしょうか。

児童らを屋上

複数の避難先想定を

中に移動しました。

グラウンドに着陸後、 コプターに救助され、

坂元

た。翌朝、自衛隊のヘリ

わりにして夜を明かしま



=2011年3月11日午後4時すぎ、津波に覆われた中浜小周辺

今夏から、震災遺構として の一人として、多くの人に 体験と教訓を伝えたいと思 般公開されます。

をさせ、

あの時の判断が正

は必要です。 定した複数の避難の選択肢 んが、さまざまな被害を想 しかったか今も分かりませ 中浜小は閉校し、校舎は

5

伝える

児童と教

呼び掛けました。 の高さ。とっさに足し算を 舎は2階天井までで約8以 ・5

以分かさ上げされ、校 校舎敷地は高潮に備えて1 「屋上に逃げよう」と

波」との情報が聞こえます。

来られないかもしれない い階段を上ってくれまし 午後3時5分すぎだった 児童らは落ち着いて、 。重圧に身が震えました。 一度上ったら、下りて

合わせていました。 今思う

た。

す 食べ物も水もない。でも、今夜はここに泊まります。 暖かい朝日は必ず上りま 「最大の危険は去りました。 長として皆に伝えました。

大道具を解体して床に敷 **眉庫にあった学校行事の** 大きなケースをトイレ

錯覚するほどでした。 突き抜けていきます。校舎 蓄がありませんでした。 出しましたが、屋上には備が「おなかすいた」と言い が船のように進んでいると 波が収束した夕刻、児童

ガラスを破り、1~2階を 水があっという間に校舎の 壁にぶつかってきました。

コミュニティーを活性化

2018年に防災士育成を目的とした「B OSAI推進室」を開設しました。年3~ 4回の講座を開き、これまでに学生や市 民など約300人が防災士の資格を得てい ます。

地元の消防団での経験から、防災活動 をきっかけに地域コミュニティーの活性 八戸学院地域連携研究センター BOSAI推進室室長 井上 丹さん(36)



化を図れると思いました。防災を考える際、まず頭に浮かぶのは地元や身近な地 域の安全。防災意識が強い学生は、地域 への思いも強いと感じます。

けて避難し、そのサンダルンダルで恐る恐る踏み分

て帰宅する。

で雪が舞う中を数時間歩い

いても、

備えの大事さは分かって

地域の未来をつくっていくのは若者た ちです。学生が資格取得を機に防災に興 味を持ち、地域に関わってほしいです。

増えています。昨年4月には拠点となる ビジターセンターが完成し、利用者の防



災・減災への理解度は深まっています。 昨年12月、日本ジオパークに再認定さ れました。地質・地形遺産の価値を伝え るのが活動の根幹ですが、ジオパークは 地域の将来を考えるツールでもありま 地域の守るべき価値を見いだし、伝 えていく取り組みの必要性を感じます。

守るべき価値を伝えたい

避難できた可能性はありま

屋上で児童に怖い思い

時間近くあり、坂元中に

結果として津波到達まで

栗駒山麓ジオパーク推進協議会専門員 中川 理絵さん(28) ジオパーク活動の中で主に防災教育を 担当しています。岩手・宮城内陸地震に 見舞われた栗原市には荒砥沢崩落地など 災害を学べる現場が多く、小中学生や高 校生対象のジオパーク学習の件数は年々